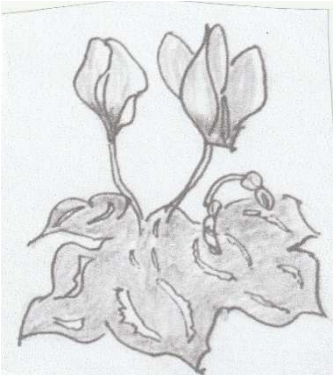
第１９０号

芥川だより

発行日＊２０２２年１１月１日　e-mail: ab_879686240@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集　　川口　伸
発行 人　　下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部２００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊



私の直感では日本人は劣化している

さっぱり本も読まなくなったし、新聞も過去のものになった。ネットの題目を流し読む以外に活字と接することはない。こんな自分が世間のあれこれを書くのもおくがましいが、私の直感的ひらめきで書いているのでお許しあれ。

私が接する外国人といえば現場で働いている若者たちである。めったに口もきかない、ただただ彼らの働きぶりを毎日見ていて感心するのは、彼らは日本人の働きと比較しても優れている事だけは確かである。数多くの現場で外国人労働者の働きぶりを見ていると日本人とのそれと比較する習性は消え外国人の優れた働きぶりが当たり前のように思えてくるから不思議だ。日本人の勤勉さや働きぶりが賞賛されたのは昔の話だ、今は食べ過ぎて太った豚のように口と金に頼って生きている化け物のように見えてくる。

こんな日本人を誰も好まないし本人も好きでやっているわけではないだろう。しかし、現実は厳しい。日本人は運よく手に入れた富を背景にどんどん怠慢になり汗をかくことを嫌がり都合のいい外国人に任せてきたのだ。似たような国があるドイツだ、ドイツもトルコからの移民で嫌な仕事を彼らにさせてきた。ドイツは階層社会だ、下層の移民とハイソサエティーの階層がある。

ヨーロッパの国々は階層社会が多い。金持ちと貧乏人に分けられた階層を持つ国家だ。みんなが平等で自由な社会ではない。いわば社会の不平等を根底に持つ国である。これらの国は先進国の持つ根本的な内政問題を未だ解決していない。今ほど難しい時期はない、西側諸国か共産主義を掲げる中国かその亜流のロシアか、何が正しくて何が間違っているのか判断しにくい時代だ。

我々は、冷静に判断しなくてはいけない。多くのマスコミは金儲けの手段に成り下がり真実を伝える事を放棄してしまった。頼るべきは、自分の直感だ。真実の匂いを嗅ぎ分ける己の力だ。ふるくさいように思えるが、人の感受性を大事にして時々に感じる直感をすくい上げ行動に移せば新たな世界が見えてくるはずだ。

死をめぐるあれやこれ（９６）　石川　吾郎

社会を衰退させるインボイス制度

インボイス制度がほぼ一年後、来年十月から導入されるという。この制度は、売上一千万円以下の、個人事業者やフリーランス、零細企業など、弱い立場の人々から消費税としてむしり取るような制度だ。こういった人たちは、若者たちが多いと言われる。若者が新しい事業を立ち上げたり芸術や文化の分野などで活動をしようとしたりするときに、最初から経済的に恵まれることはほとんどない。どんなに才能があっても、はじめは貧しく弱い立場だ。そんな若者たちの創造力の足を引っ張るような制度がインボイス制度に他ならない。つまりこの制度は、わが日本の国の発展の新しい芽を摘み取ることを意味している。これは私たちの、子供や孫の世代に大きくのしかかってくることに思いを至そう。◆そもそも論から言えば、消費税が格差を拡大する悪税であり、これが社会保障の財源になっているとするのは、妄言だ。消費税増税と同時に法人税減税が同じような規模で施行されることが繰り返されてきたことを考えれば、消費税は法人税減税の補完の役割を担っているのだと言ってよい。このような消費税を廃止し、高所得者への所得税負担を大きくし、金融資産への分離課税を廃止し、内部留保をため込む企業への課税を重くするなどの、まともな税制に戻すことが最も必要なことなのだ。◆インボイス制度は、本当に導入されるのか、まだ不透明

な部分が多いという。インボイス制度導入反対の声を大きくしていくことが重要で、導入の中止に追い込める段階にあるという。

芥川だより一九〇号　目次　ページ

巻頭エッセイ　下村嘉明　1
巻頭コラム96　石川吾郎　1
素老人☆よもだ帳　１０４　坂本一光　2
哲学爺いの時事放談54　祖蔵哲　3
大峰奥駆道60　下村嘉明　5
新型コロナウイルス愚考　その27　明石幸次郎　5
オクラの山たより74　因了生　6
隠された歴史49　満田正賢　10
道を行く　三三　成瀬和之　12
プロパガンダに騙されるな　学び直そう戦争と憲法の歴史（八）　成瀬和之　14
俳句　土田裕　影山武司　15
編集後記　ＳＫ生　15
ふみの道草53　山椒魚　16

素老人☆よもだ帳（１０４）

坂本一光

◆永遠の嘘を信じてくれ

先日久しぶりに、中島みゆきが歌う「永遠の嘘をついてくれ」をテレビで聴いた。作詞作曲はともに彼女で、歌詞は以下のようである。

永遠の嘘をついてくれ
中島みゆき

ニューヨークは粉雪の中らしい
成田からの便は
まだまにあうだろうか
片っぱしから友達に借りまくれば
けっして行けない場所でもないだろう
ニューヨークぐらい

なのに　永遠の嘘を聞きたくて
今日もまだこの街で酔っている
永遠の嘘を聞きたくて
今はまだ二人とも旅の途中だと
君よ　永遠の嘘をついてくれ
いつまでもたねあかしをしないでくれ
永遠の嘘をついてくれ
なにもかも愛ゆえのことだったと言ってくれ

この国を見限ってやるのは
俺のほうだと
追われながらほざいた友からの
手紙には
上海の裏街で病んでいると
見知らぬ誰かの　下手な代筆文字

なのに　永遠の嘘をつきたくて
探しには来るなと結んでいる
永遠の嘘をつきたくて
今はまだ僕たちは旅の途中だと
君よ　永遠の嘘をついてくれ
いつまでもたねあかしをしないでくれ
永遠の嘘をついてくれ
一度は夢を見せてくれた君じゃないか

傷ついた獣たちは最後の力で牙をむく
放っておいてくれと
最後の力で嘘をつく
嘘をつけ永遠のさよならのかわりに
やりきれない事実のかわりに

たとえ　くり返し何故と尋ねても
振り払え風のようにあざやかに
人はみな望む答えだけを
聞けるまで尋ね続けてしまう
ものだから
君よ　永遠の嘘をついてくれ
いつまでもたねあかしをしないでくれ
永遠の嘘をついてくれ
出会わなければよかった人などないと
笑ってくれ

君よ　永遠の嘘をついてくれ
いつまでもたねあかしをしないでくれ
永遠の嘘をついてくれ
出会わなければよかった人などないと
笑ってくれ

吉田拓郎が歌うこの歌を初めて聞いたとき、私が思ったことは二つあった。

一つは、私には、誰かに「君よ　永遠の嘘をついてくれ」などと思う気持ちは全くないこと。そうではなくて、私がこうして思ったりしゃべっていることはみな「永遠の嘘」であり、「君よ　永遠の嘘を信じてくれ」と思っているということだった。この歌は私に、私が飛んでもない「嘘つき」であることを自覚させた。

そして、もう一つは、「出会わなければよかった人などない」と私も口にしながら、「本当にそう言って笑えるか」ということだった。少なくとも国民の目で見れば、出会わなかった方がよかった政治家などはゴマンといるのだ。

「永遠の嘘」という表現で「嘘」の中に「まこと」を見ようとするこの歌は、「永遠の嘘」という「まこと」を求めて人は生きていることを教える。

そうしたゆらゆらしながら人が生きる心を見事にうたった歌が、河島英五の「てんびんばかり」である。

てんびんばかり
河島英五

真実は一つなのか
何処にでも転がっているのかい
一体そんなものが　あるんだろうか
何も解らないで僕はいる

そしてそれがあるとすれば
何処まで行けば　見えてくるんだろう
そしてそれがないものねだりなら
何を頼りに
生きて行けばいいんだろう

家を出て行く息子がいる
引き止めようとする　母親がいる
どちらも愛してる　どちらも憎んでる
どちらも泣いている

偉い人は僕を叱るけど
その自信は何処からくるんだろう
でも　もしも僕が偉くなったら
やっぱり僕も誰かを叱るだろう

男はいつでも威張っているけど
どんな目で女を見つめているんだろう
女はいつでも威張らせておくけど
どんな目で男をみつめているんだろう

僕が何気なく呟いた言葉が
君をとっても悲しませてしまった
慰めようと
言葉を掛けたら
君は泣き出してしまった

長い間君はとっても
辛い思いをしてきたのでしょう
やっと君を幸せに出来ると思ったのに
君はもういない

毎朝決まった時間に起きる人の喜びは
何処にあるんだろう
電信柱に小便ひっかけた
野良犬の悲しみは
何処にあるんだろう

うちの仔犬はとても臆病で
一人では街を歩けない
首輪を付けると　とても自由だ
僕を神様だと思っているんだろう

拳を挙げる人々と　手を合わす人々が
言い争いを続ける間に
ホラ　ごらんなさい野良犬の母さんが
かわいい仔犬を生みました

母親が赤ン坊を殺しても
仕方のなかった時代なんて　悲しいね
母親が赤ン坊を殺したら
気違いと呼ばれる今は　平和な時

※　誤魔化さないで　そんな言葉では
僕は満足出来ないのです
天秤計りは重たい方に傾くに
決まっているじゃないか
どちらも　もう一方より重たいくせに
どちらへも傾かないなんておかしいよ

※くりかえし

それにしても、である。昨今の内外の出来事を見るとき、天秤計りは重たい方に傾くべきだと思うのは、素老人だけではないだろう。

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

「哲学爺い」の時事放談（５４）

祖蔵　哲

『世界観の哲学』

ロシアの侵攻によるウクライナ戦争はもう八か月を越えても続き、核戦争の脅威は増している。「世界終末時計」はウクライナ侵攻後「100 秒前」を指し、核兵器使用の危険性はあの「キューバ危機」以上に過去六〇年間で最も高まっている。さらにコロナ禍は三年目を迎え、地球環境変動は様々な災害を世界にもたらしている。それらの異変の影響か、英国では短期の政権交代、イタリアなどでは極右政権の誕生など先行きの見えない状態が起こっている。個別的事象でも韓国で起きたハロウィン圧死事故、インドでの橋落下事故など大規模かつ予想不可能な事態が数多く発生してきている。果たしてこの先世界はどうなるのであろうか。誰もが「不安」を抱いて生きていかなければならない世界が出現している。

（1）不安の哲学

人間はだれでもが「不安」をもつ。しかしこの「不安」は比較的近代の概念である。というのは「不安」とはその原因が何かわからないことに対してもつ人間の心理状態であるからである。「近代以前」の世界は神が支配する世界であり、すべての原因は神によるものと理解されていた。だからこのような「近代的不安」はなかったと考えられる。しかし、近代以後、人間の「理性」が神にとって代わった。理性による近代科学は「不安の状態」はうまく説明できた。しかし、いくら「状態」を説明しても人々の不安を取り除くことはできない。なぜなら近代科学が扱うのは「物質」だけだから。「心と物」を分ける「二元論」でいくら「物」を説明できても、「心」は説明できない。この近代科学が招いた状況は哲学において「不安の哲学」を生み、キルケゴールやハイデガーという哲学者が「不安」を「無」をいう存在と反対概念で語った。つまり、

人間は今現在「存在する」とは常に「存在しない」という「不安」にさらされていることにある。人間はいつか死ぬ。この時間性が不安の概念だと考えている。

（2）意味とは何か

「不安」が「無」に対するものであるとしたら、なぜこのような世界が「在る」のか。今現在は「無」ではなく確実に「在る」。では何のためにこの世界はあるのか。現実に引き寄せて考えてみよう。いまだ戦争が続く悲惨な世界、コロナのような病原菌に苦しまされている世界、気候変動によって洪水、旱魃に苦しめる世界。このような「世界」は何のためにあるのか。知りたいのはこの現実世界の「意味」である。先ほどもいったが、近代科学はこの世界は「どのようにであるか」は説明しているが、「なぜあるのか」は説明しない。今、私たちが知りたいのはこの苦しい、悲惨な世界がなぜあるのかという「意味」である。

「人生の意味は何か」というようなときの「意味」は「意義」と同じように価値観的なものも含むようだが、「意味」はより普遍的に人間の存在の「目的」というようなことを表す。つまり、人間は何を「目的」に生きているのか。人間の生の「ゴール」は何であり、それにどのように向かっているのかである。

（3）二つの「自然観」

人間の人生や歴史をどのように見るかは「世界観」に属する。人間も含めた世界は「自然」であるから、それは「自然観」とも言える。これまでの「自然観」は「機械論」と「目的論」との対立であったといえる。古代ギリシャを代表するアリストテレスは、自然物の存在原因として四つを挙げた。それは「質量因」「形相因」「作用因」「目的因」の「四原因説」とよばれる。家を建てるという例えで言うと、そのためには「質量因」である木材などの物がいる、そしてどのような建物にするかという設計図「形相因」がいる。さらに大工さんには建築するという「作用因」が、そして最終的には「雨露をしのいで快適に住む」という「目的因」が必要である。アリストテレスはリンゴが地面に落ちるのは、地球上の物は本来地面の底にあったのであり、落下はそこへ戻ろうとする「目的」の実現だと説明する。この「目的論的自然観」を後に登場したキリスト教は神を存在とうまく調和させた。つまり、「目的因」を個々人の目的でなく「神」の最善の目的に置き換えた。なぜなら、木材も設計図も大工も、リンゴもそれを創造したのは「神」だからである。このような世界の意味が自然や神の意志によるものという理解はしばらく人間の不安を軽減させていた。

（4）近代科学的思考「機械論的自然観」

アリストテレスの目的論的自然観は古代以来、キリスト教世界を通じて精神世界の支配的な自然観であった。しかしガリレオ、デカルト、ニュートンの近代科学の登場、いわゆる「科学革命」は自然現象をすべて機械的に物理化学的に説明する機械論的自然観に置き換え、目的論的世界観を駆逐していった。デカルトは「動物機械論」を著している。ただし例外的にライプニッツは「予定調和説」により、機械論と目的論を和解する哲学を「モナド」という概念をつかって展開したが。

しかし、この「機械論的自然観」は未だ世界観の主流を占める考え方である。自然科学は対象物を要素分解し分析することによってその組み立て方を説明する。この要素還元分析が世界の意味＝目的とされているのである。しかし、本当にこれによって我々はこの世界がどこに向かっているのか、なぜこのような困難、苦悩があるのかが了解できるのか。

（5）カントの超越論的自然観

「目的論」の欠点は最初から「目的」を設定していることである。ある事象が起こる前から「目標」を決定しておいてあとはそれに合わせる理屈をつけ足すだけである。一方、「機械論」の欠点は、過去の事象は常に繰り返されるという経験論が元になり「過程」が固定されていることである。１００回同じことが起こったとしても１０１回目もそうなるとは確実ではない。

このような「目的論」と「機械論」の欠点を見抜き、それを乗り越える「世界観」を考えたのがカントである。カントは両者を乗り越える世界観を考えた。二項対立を乗り越えるだから「超越論哲学」と呼ばれている。かれは「機械論」的に世界を分析検討する過程に「目的論」的思考を導入するという思考法を提案する。つまり、自然を分析する際に、自然は何か「目的」を持つのではないかと仮定してみるということである。この「～としてみる」という思考の利点は「発見」という機能をもつ。つまり「仮説」を立てて物事を判断するということである。その仮説が現実と合致しなければ次の新しい仮説が立てられる。これはある意味、仮説と実験を繰り返し理論を組み立てる現代科学の方法とよく似ている。

「目的論」は普遍を前提とする演繹法をとっていると考えられる、一方「機械論」は経験的個別を前提とする帰納法を使っている。その両方の欠点を補っているのがこの仮説演繹法ということになる。現代哲学も科学哲学という分野はこの思考法を使っているようだ。

さて、本題に戻ると問題は「世界はどこに向かっているか」である。最初から

ある目的や方向が決まっているのか、それとも同じことが今後も繰り返されるのかである。極端に言えば「楽観主義」に生きるか、「悲観論」に生きるかの選択しかないということになる。しかし、今月、学んだことは、現在世界で起こっていることの事実を正確に読み取り、その中の異常を発見し、それに「仮説」を立てこの「異常」をうまく説明する論理を考え出すこともできるかもしれないということである。そのためには、科学的とは言い難い想像力が必要になるかもしれないし、希望や信頼といった抽象的概念が役に立つかもしれない。案外、世界は我々の意志の強さで動くかもしれないという妄想もかすかな望みとして残しておこう。

大峯奥駈道（６０）

下村　嘉明

体験型人間学　１０

私は、毎日警備員として働きながら、多くの事を学んでいる。多くの現場で目にする光景は、いかに日本人はいいかげんな人間かということである。先日、１０日間ほど県道の街路樹の剪定作業の警備を行った。これまでの仕事の中では安易な仕事だった。

５人ほどの作業員と警備が２人で朝の八時半ぐらいから仕事を始め４時過ぎには仕事を終えて４時半ごろには解散というのが平均的なパターンだ。

県道の街路樹は沢山あるが、区分けされ多くの造園業関係の会社が剪定を受け持って仕事をする。人通りの多い所では、警備員が歩行者や自転車の通行を安全誘導し事故の無いように気を付ける。私は、警備員なのでひたすら歩道で通行人の誘導をする。特に学校の近くで登下校時に作業場所が当たると大変だ。いくら言っても子供はいう事を聞かない。それでも何とか事故もなく作業を終えてきれいに剪定された街路樹を見ると気持ちがよい。

私が腹立たしく思うのは、私たち警備員の指示に全く無関心で無視をする人が一定数いることである。もう一点は、街路樹などグリーンが多い環境を維持するのは、大変お金がかかるという事である。都会の中で樹々や草花を育てる事を公共事業として続けていくのはかなり無理がある。

大きなマンションでも、広い庭園が流行になっていて、造園業者が頻繁に出入りし管理している。きれいに管理された環境を作っている。しかし、こんなことが、いつまでも続けられるだろうか。私は、経済的に無理だと思う。いくら頑張っても、田舎の自然にはかてない。日本にはすばらしい自然が地方の田舎には残されている。どうせ金を使うなら、田舎の維持管理に使うほうが将来的にも価値がある。どんな立派なマンションに住んでいても田舎の管理された家には勝てない。このまま田舎を放置していたら、外国人が喜んで住み始めるだろう。世界的に見て日本ほど自然に恵まれた国は、他にないのだから。

新型コロナウイルス禍愚考（その２７）

明石　幸次郎

あと少しで、三年になろうとする新型コロナウイルス禍、核のリスクすら取り沙汰されるウクライナ戦争、その影響による物価高騰、温暖化に伴う異常気象、所得格差の拡大、人口減少と加えて中国の台湾への軍事進攻への脅威と北朝鮮のミサイル発射等々軍事的暴走など、我らを取りまく社会は不安がまん延しています。

それらの不安、閉塞感を紛らわせようとして、私を含む人々は刹那的な楽しみに街に出て買い物、飲食、旅行、観劇、娯楽などの人出は、コロナ禍以前に戻ろうとしています。

コロナ規制緩和で韓国ソウルではハロウィーンを祝う?若者達が大勢押しかけた雑踏事故で、日本人２名を含む１５６人もの圧死者を出した大事故がありました。

日本も韓国も、小林一茶が江戸の花見で“世の中は地獄の上の花見かな”と謳ったような社会状況になって来ています。

さて、こんな状況下で、私のような冥途に向かって寄り道しながらいよいよ死が見えてきた高齢者は、社会の為に何をすべきなのかをこのコロナ禍で愚考しています。

それは、自分を犠牲にせずに、人の役に立つにはどうすればよいかを追求している日本GRACE研究会が掲げている５つのステップが参考になるのではと思い到りました。それは、

G：Gathering　Attention
　注意を集中させる
R：Recalling　Intention
　動機と意図を想い起こす
A：Attunement　to self/o
　自己と他者の思考・感情・感覚に気づきを向ける
C：Considering what will serve
　何が役に立つかを熟慮する
E：Engaging and Ending
　行動を起こし、終結させる

最後のＥは熟慮したら行動する「知行合一」の陽明学に通じるものがあるよう

で、知るだけでは駄目で、知ってやろうとして行動に移す、とにかくバットを振ってみる。バットを振らないとボールは当らない。ポストコロナに向けてあるNPO法人の中で実践してみたいとバットを用意しています。

オクラの山たより（74）

困了生

一

蕪村の詩的な世界を見ていく上でどうしてもはずせないのが「春風馬堤曲」「澱河歌」「北寿老仙をいたむ」という三編の俳詩です。他作の句、自作の句をふくんで和漢の詩の諸形態を駆使して蕪村が完成させた韻文のジャンルを「俳詩」と名づけたのは穎原退蔵です。すでにこの紙面でも「北寿老仙をいたむ」を紹介しましたが、それらは江戸時代の作であることを忘れさせるほど近代的な要素をもった詩作品であるといっていいと考えられています。

中でも有名な作品は「春風馬堤曲」であり、高校の教科書にも載せられている作品です。内容はまず序文があり、故郷毛馬村に知人の老人を訪ねた、という語りから始まります。そして、その途中、帰省する「容姿嬋娟（ようしせんけん）、癡情（ちじょう）憐れむべ」き若い娘、つまり、たいそう美しくて若い娘らしい色気もある娘と道連れとなり、話を交わしながら、春光の毛馬の堤をたどっていく。その娘に成り代わって十八首の歌曲を作り、娘心の切ない思いを歌い上げることを思い立ったと語ります。十八首の構成は「引道具の狂言（芝居の背景その他の道具を、車を付けて適宜に移動できるようにした仕掛けを使った芝居のこと）、座元は夜半亭（芝居の興行元は蕪村）」と伏見の門人に送った書簡にあるように芝居（歌舞伎）仕立てになっています。場面がつぎつぎと変化し、そのたび毎に何らかの出来事が起こりそれをつないで一片の曲としています。

俳詩の形態というものを具体的に見るために「春風馬堤曲」の書き出しの部分と末尾の部分を示しましょう。漢詩の書き下しは詩の後に示し、口語訳は書き下しの後に示します。

○やぶ入りや難波を出でて長柄川
○春風や堤長うして家遠し
○堤下摘芳草　荊与棘塞路
荊棘何無情　裂裙且傷股
堤より下りて芳草を摘めば
荊と棘とは路を塞ぐ
荊棘何ぞ無情なる
裙を裂き且つ股を傷つく
（堤から下りて、すてきな匂いのする春の草を摘もうとすると、イバラが道をふさいでしまう。憎らしいイバラ。どうしてそんなにつれないの。私の着物の裾を引き裂いたりして。その上ももまで引っかいたりしてさ。痛いったらありゃしないわ）

発句が二句あり続いて漢詩となります。このあたりが俳詩のスタイルということとなります。

最初の句にある「長柄川」ですが、蕪村研究者によるさまざまな検証によると当時の大坂の街から長柄川とは淀川の分流中津川の古称で淀川と中津川の分岐点にあたる長柄堤の突端に淀川を東に横断して毛馬に渡る渡し場があり、そこから舟を下りれば毛馬まではほんの目と鼻の先でした。ところが「春風馬堤曲」では「堤長うして家遠し」と娘の実家までの距離がずいぶんあるように書かれています。もともと「春風馬堤曲」は蕪村みずからが語るように「懐旧のやるかたなきよりうめき出でたる実情」から成立した作品であり、抑えがたい望郷の念、少年期に死別した母への思慕などを、若い娘の思いという虚構に託して吐露した作品といえます。全体が懐旧の情から生まれたフイクションなのですから現実の地理と内容が矛盾するなどといったことは問題にもならないでしょう。

この「春風馬堤曲」で蕪村は藪入りで実家へと嬉しそうに帰っていく小娘を心に思い描いています。引用した漢詩の部分は娘のつぶやきです。若い娘の「股を裂く」とはエーッとびっくりする表現ですが「股」とは「腿（もも）」のこと。しかし、どちらであってもきわどい表現です。この若い娘のイメージは前年に十六、七歳で結婚した蕪村の娘くのだというのが多くの研究者が主張する説です。

この「春風馬堤曲」の終わりは太祇の句でしめくくられます。

○君不見（君見ずや）古人太祇が句
藪入の寝るやひとりの親の側

実家にたどり着いた娘は母のもとに帰って安らかに眠ることを暗示して曲は終わります。「君不見古人太祇が句」は「あなたも御存知でしょう。炭太祇にこんな句がありましたね」という意味です。曲の終わりに自作の「藪入の夢や小豆の煮へる中（うち）」という自句があるにもかかわらず太祇の句をここになぜ持ってきたかは気になりますが、今はこれ以上触れません。

二

さて、漢詩や発句をとりまぜて詩を作っていく俳詩の代表は今まで述べた「春風馬堤曲」です。この俳詩はすでに述べたように古典の教科書に載るほど有名な

作品で解説書も多く出されています。また、「北寿老仙をいたむ」も萩原朔太郎が近代詩と比べても遜色がない作品であると称賛して以来これも有名となりました。しかし、「澱河歌」は他の二作品に比べいささか影が薄いようです。

一七七七（安永七年）の蕪村春興帖「夜半楽」に「春風馬堤曲」、「老鶯児（ろうおうじ　意味は年老いたウグイスのこと）」とともに収められています。「夜半楽」に収められた「澱河歌」は次の通りです。漢詩の書き下しは漢詩の後に示し、口語訳はあとの文章の中で示します。

澱河歌　三首

○春水浮梅花　南流菟合澱
錦纜君勿解　急瀬舟如電
春水ニ梅花浮カビ
南流シテ菟ハ澱ニ合ス
錦纜（きんらん）君解クコトナカレ
急瀬（きゅうらい）舟電（でん）ノ如シ

○菟水合澱水　交流如一身
舟中願同寝　長為浪花人
菟水ハ澱水ニ合シテ
交流一身ノ如シ
舟中願ハクバ寝（しん）ヲ同（とも）ニシ
長ク浪花ノ人ト為（な）ラン

○君は水上の梅のごとし花水に
浮（うかみ）て去（さる）こと急なり
妾（しょう）は江頭の柳の如し影水に
沈（しずみ）てしたがふことあたはず

題名の「澱河歌」の「澱」とは淀川のことです。「菟」と宇治川のことで「菟道」とは「うじ」と読みます。第一首の漢詩の口語訳は次の通りです。

春の水は梅の花を浮かべて南に流れやがて宇治川は淀川に合流します。舟をつなぎとめる錦のとも綱を、あなた、どうか解かないでください。綱を解いたら速い流れに舟は稲妻のように流れ下ってしまい、もうあなたとは会えなくなってしまうでしょうから。

宇治川、桂川、木津川の三川は石清水八幡宮のすぐ北のあたり合流し淀川となります。石清水八幡宮のある高台からの三川合流の景観はみごとです。続いて漢詩第二首の口語訳。

宇治川の水は淀川の水と合わさって流れていき、まるで一つ身のようになります。その上を流れ下っていく舟の中で願わくばあなたと共寝をして、浪花人となって末長くあなたと一緒にいたいものです。

第三首は「君」について行けない「妾」の悲しみを歌います。口語訳をすると次のようです。

あなたが水に浮かぶ梅の花のように自由なお身の上、花は水に浮かんでさっと私の前を流れ去ってしまいます。私は川岸の柳のように不自由な身の上、自分の姿を水に沈めることしかできず、あなたと一緒についていくことはできないのです。

一読、「澱河歌」が高校生の古典の教科書に掲載されることがなかった理由がわかっていただけたでしょうか。高校生が学ぶには少しばかり、いや、艶っぽい部分が多過ぎる、と。このためでしょうか、「澱河歌」は長らく目立たない存在でありました。しかし、この作品が一躍脚光を浴びるようになったのは安東次男の「『澱河歌』の周辺」（1962 年 未来社）という評論です。宇治川と流れを交流し彎曲する淀川の流れの上に豊麗な女体幻想を重ねるという解釈は発表当時大きな反響を呼びました。さらに老いたる蕪村には浪花に愛人がいたかもしれない、という指摘は人々を驚愕させるものでした。しかし、最晩年に祇園の芸妓小糸に恋心を抱き門人たちをヤキモキさせたとはいえ、浪花に愛人を隠していた蕪村の女体幻想から生まれたのが「澱河歌」であったというのはいささか早とちりではないか、とも考えられます。事実、蕪村には虚構や夢幻に満ちた句の多いことはよく知られたことです。この点、つまり「澱河歌」が老蕪村の女体への思いの所産であるかどうかを整理するためには「澱河歌」の成り立ちを先達たちの研究成果、特に尾形仂のそれを参考にして検討していく必要があります。

三

「澱河歌」の成り立ちを見ていく上で重要な絵画作品があります。次に示した「澱河歌」扇面自画賛です。右に「澱河歌」三首が書かれ、中央に見送る妓女、左に見送られる武家風の男が描かれています。

これが「澱河歌」の初案とされています。扇子で顔を隠して立ち去ろうとする客とそれを恨めしげに見送る遊女を描いた作品です。二人の姿は蕪村の俳画には

珍しく江戸時代初期の身なりで、蕪村の生きていた時代の風俗ではありません。この自画賛の内容はほぼ「夜半楽」に収められた「澱河歌」と同じですが、次のような前書きがついています。

遊伏見百花楼送帰浪花人代妓（伏見百花楼に遊びて、浪花に帰る人を送る。妓に代はりて）

「伏見百花楼に遊びて、浪花に帰る人を送る。妓に代はりて」という記述から見れば「澱河歌」の「初案」は三十石舟で伏見から大坂に帰る友人を送って伏見の百花楼に遊んだときの酒席の場で即興に作られた作品ということとなります。となると知りたくなるのは大阪に帰っていた「浪花人」とは誰かです。それを追求していく上でいくつかの資料があります。

その一つが門人几董の「丙申之句帖」です。この句帖には「澱河歌」と同じときに伏見での送別の宴で作られたとされる次の漢詩が記載されています。

送友人帰浪華
（友人の浪華に帰るを送る）
今夜到伏水　明朝直帰郷
舟中作何夢　惜別断我腸
―今夜伏水（ふしみ）ニ到ル
明朝タダチニ郷ニ帰ラン
舟中何ノ夢ヲカ作（な）ス
別レヲ惜シミテ我ガ腸ヲ断ツ

「丙申之句帖」の記載位置からすると、この漢詩は丙申の年つまり一七七六（安永五）年二月十日頃の作。この年、几董の句帖には漢詩の記載が多くあり、蕪村の一門ではかなりの漢詩熱のあったことが想像できます。そうした熱気が送別の宴席における即興の詩作をもたらしたのでしょう。もちろん几董の漢詩では「友人」が誰だかは不明ですが、このころ大阪方面にいた蕪村の門人の太魯かとも思えます。太魯は粋人として芸妓に別れを惜しむ涙を流させる十分な資格がありました。

また、几董の句作の記録である「几董句稿」によると几董は一七七四（安永三）年二月十三日、一七七七（安永六）年には二月十四日に伏見の寒梅に出かけています。となると安永五年の二月も寒梅に伏見に出かけた可能性はあり、伏見での送別の詩が二月十日ごろとすれば「春水ニ梅花浮カビ」という蕪村の詩の描く景況にピタリと合ってきます。

さらに興味深い資料があります。安永五年二月十二日付の几董に宛てた蕪村の書簡です。まず一昨夜の伏見百花楼での送別の宴会での酒が今日になっても醒めず絵もちゃんと描けないと愚痴を言った後、三宅嘯山の門人である南雅が出す摺り物のための出句依頼に対して次の七言絶句を作って贈ったことを報じています。

美人出帳独俳諧　春色頻辞窗下梅
却恨落花侵斂鬢　一花払去一花来
―美人帳を出でて独り俳徊す
春色しきりに辞す窗下（そうか）の梅　却って恨む落花の斂鬢（れんびん）を侵すを
一花払ひ去れば一花来たる

「窗下」は「窓の下」の意で「斂鬢」は「きちんとくしけずった耳ぎわ髪」の意ですが、この「斂鬢」は中国の古典詩には見られない語で蕪村の造語と考えられます。そうした典拠をもたない語を自由自在にまじえて用いるのは蕪村らしいところといえます。独り歩んでいく美女に梅の花びらが「斂鬢」に降りかかり払ってもまた落ちてくるという景色は春の雰囲気をよく表現しています。この漢詩に続いてさらに書簡では次のように書かれています。

かくなんいたし申し候。此の節、俳情少なき折ふし、けくましならんとも存じ候。（中略）此の節の発句、二三句申しつかはし候。

① んめ咲くやどれがんめやらむめじやら

② んめ咲て帯買ふ室の遊女かな

（下略）

「けく」は「結局」の意で、「けくましならん」とは、結局はこれという発句がないので漢詩でも詠んだ方がましだということを言っています。といっても「ましな発句」がないということでもなく、二つの句を記しています。

①の句意は「梅が咲いた。いったいどれが『んめ』で、どれが『むめ』なのやら、わからんものじゃな」であり、②の句意は「梅が咲いて、すっかり春になった播州室の港でワイワイと騒いで帯を買い求めている遊女たち」です。この二句とも蕪村死後に几董によって編集された「蕪村句集」に収められていますが、その際に次のように修整されています。

① 梅咲ぬどれがむめやらうめぢややら

② 梅咲て帯買ふ室の遊女かな

①の句には几董への書簡にはなかった次の前書きがついています。

あら、むづかしの仮名遣いやな。字義に害あらずんば、アヽまゝよ。
（ああ、頭の痛くなる学者たちの仮名遣い論争だな。字義に間違いなければ、どうでもええわい）

伏見で酒宴のあった安永五年の正月に本居宣長（1730～1801）が京都の書肆から「字音仮名用格」を刊行し「ん」音を「む」と書くべき事を主張しました。日本の古

代には撥音（「ん」音）も半濁音（パ・ピ・プ・ペ・ポといった音）もなく中国の卑しい漢字音が日本に入ってきてからできたものだと主張したのです。この宣長の説に対して上田秋成が猛烈に反駁して近世中期の有名な論争になりました。

さて、几董の「丙申之句帖」によれば蕪村と几董とは安永五年の春に大坂から上田秋成を迎えて会談をしています。その席上で出版されたばかりの宣長の話題が出たのは容易に想像できます。多弁な秋成のことですからかなり痛切な批判を二人に対して述べたことでしょう。この「んめ咲くやどれがんめやらむめじやら」を前書きなしで几董に報じたのも几董が同席していて、その話題をよく知っていたためでしょう。以上から見ていくと伏見で蕪村が浪華に帰るのを見送った相手は上田秋成ではないか、と考えられるのです。

四

上田秋成（1734～1809）は興味深い人物です。曾根崎の妓女の子として生まれたこと、それは五歳の時にかかった天然痘のため右手中指と左手人差し指とが短くなるという不幸とともに生涯消しがたい運命を刻印されたといえます。

花柳の巷に出入りし街の「浮浪子（のらもの）」とも交わるという荒れた青年時代を送った一方、和漢の学に通じ、蕪村からは「奇異のくせ者」、几董からは「詩をよくし……無双の才子」と評され、蕪村の死に際して「かな書きの詩人西せり東風吹いて」と悼んだ秋成です。この秋成であればやや艶っぽい和漢混交の詩編や漢詩を贈る相手としてはいかにもふさわしいように思えます。いや、むしろ送別の相手が秋成であればこそ、その場の盛り上がりの空気の中で「澱河歌」という異色作ができあがったというべきでしょう。また、このとき秋成はすでに「加島法師」と呼ばれるように頭を丸めていましたが、この法師の秋成であればこそ扇面で見送られる人物を武士としたことは「妓に代わりて」という設定とともに自分も相手も虚構化して実際の酒宴の場をあたかも歌舞伎の一場面のように仕立てたということとなるでしょう。

ここまで書いてくると「澱河歌」の成立を女体幻想の所産とか娘くのの結婚や蕪村の醜聞との関わりがあるとかいったことはいささか分の悪いことになります。また、安永六年に成立した「春風馬堤曲」の余勢を駆って「澱河歌」が生まれた作だとするのもどうかな思えてきます。

そもそも「夜半楽」に「春風馬堤曲」「澱河歌」「老鶯児」の三作品がこの順序で並べて収められているのはなぜでしょうか。「夜半楽」では「春風馬堤曲」「澱河歌」に続いて

老鶯児
○春もやや　あなうぐひすよ　むかし声

となって連作詩編を終わっています。「老鶯児」は「ウグイス婆さん」という意味であり、「春も……」の句意は「春も次第に深まっていくというのに、ああ、ウグイスも少し物憂くなってきたよ。すっかり老け込んだ声で鳴いたりして」です。

もちろん、この句を蕪村の自虐的な句と見ることも可能ですが、ここでは連作詩編の中の作品としてみていきます。そうすると「春風馬堤曲」は浪花という都会で流行の化粧に倣って髪型も妓女のようにした田舎出身の小娘が毛馬までの藪入りの道行きであり、「澱河歌」は好いた客を見送る伏見の妓女の切ないつぶやき、そして、「老鶯児」はすっかり老け込んで耳障りな声で歌う老妓の嘆き節、という構成になっていることが想像できます。

連作の三作品がオムニバス形式ですが一人の女性の一生、それも明るい若い女性が徐々に転落していく一生のようなドラマになっているかのようです。あたかも樋口一葉の「たけくらべ」と「にごりえ」、さらに謡曲「卒塔婆小町」をミックスしたような物語世界が広がっているようだといえばいささか言い過ぎでしょうか。「澱河歌」を中軸にすえて「夜半楽」の三作品を眺めてみるとそんな想像も可能なような気になります。何の確証もなく、単なる想像に過ぎない話なのですが。

五

最後に、もはや蛇足ではありますが、本居宣長と上田秋成の論争について少し補足しておきます。二人の論争は蕪村の死後一七八六（天明六）年ごろに激しくなされました。論争の問題は二点で一つは古代において「ん」や「ぱ」の音はあったかどうかという国語学上の論争であり、もう一つは「日の神論争」といわれるように、日本の神話の解釈をめぐる論争でした。

今回、話題にした蕪村に関わるものとしては前者の国語学上の論争となります。この議論は、一見言葉をめぐる実証的な論争という外観を呈してはいますが、その実は、宣長の非合理な国粋主義を、秋成がからかっているというふうに受け取ることができます。都会である大坂文化人秋成がからかえばからかうほど、松坂の田舎人学者宣長はカッカと熱くなる、という構図を見て取ることができます。

ウルトラという言葉を前につけてもいい国粋主義者の宣長は撥音も半濁音も日本の古代には存在しなかったと主張します。特に「ん」の音は人間の陰部と同じように隠し覆うべき恥ずかしき音であり中国の漢字音が日本に入ってきたから生

まれた音だとしました。そして、中国語の音韻に「ん」の音があるのはそれを用いる中国人が卑しい人間である何よりの証しであるともいっています。宣長には、日本と外国とではそもそも絶対的な優劣があって、日本のことはすべて尊く正しいのであり、中国も含めて他の国のことはすべてが劣っており、かつ間違っている、という絶対的な信念がありました。これに対して秋成はさまざまな証拠を持ちだして宣長の説に真っ向から反論し、あわせて「それぞれの国にはそれぞれの言葉と音韻があり、日本だけが特別なわけではない」と徹底的に宣長の国粋主義の批判もしていきます。

この秋成と宣長の国語学上の論争は現代の常識からしますと引き分けということになります。つまり、「ん」の音は日本古代に存在せず、半濁音は古代に存在したというのが国語学者橋本進吉以来の現代の通説です。

それはともかく秋成は宣長の超国粋主義を最後まで許すことができなかったらしく大著「古事記伝」を完成させた宣長を「ひが事（間違ったこと）を いふてなりとも 弟子ほしや 古事記傳兵衛と 人はいふとも」と歌を作ってからかっています。秋成らしいのは最晩年の随筆「胆大小心録」に書かれた宣長の歌「敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山桜花」への批判です。その部分を口語訳で紹介します。

（宣長の説なんぞは田舎の者はありがたがっても）知識人の多い都では通らない。大和魂ということを何かにつけて強調するが、そんなことは都ではまったく通用しない。どこの国でもその国の「何やら魂」というものは胡散臭く鼻持ちならぬものだ。自分の肖像画の上に書いたとかいう歌は、いったいどういうつもりなのだ。自分の肖像の上に書くとはうぬぼれの極みだ。そこで俺は「敷島の大和心とかなんだかんだといい加減なことをまたほざく桜花（この歌は原文では「敷島の 大和心の 何のかの うろんな事をまた桜花」とある）」と返してやった。我ながら喧嘩っ早いねと笑ってしまったさ。

近世を代表する国学者であった宣長がよく言った「大和魂」を批判して、どこの国でも「なんとか魂」といっているものは胡散臭くて鼻持ちならないものだ、と言ってのけるあたりは大坂の文化人であった上田秋成の面目躍如たるところといっていいでしょう。「なんとか魂」といった現実を超越したといえる抽象的なものに人々が振り回されるのは大坂のリアリズムの中で育った秋成にはとてもガマンできないものだったのではないかと筆者はつい妄想します。

隠された歴史（４９）

満田　正賢

前回は、日本書紀に「大化」「白雉」「朱鳥」、続日本紀に「朱雀」「白鳳」という九州年号が記された経緯について考察しました。そして、「常色―白雉―白鳳―朱雀―朱鳥―大化」と続く二中歴（九州年号）系統と「大化―白雉―（空白）―朱雀―白鳳―朱鳥―大化」と続く皇代記（資料Ｘ）系統の二つの異なった「干支・年号対比表」が存在し、各種の縁起の中の九州年号はこの二系列のどちらかの対比表を用いて記されていると推定しました。皇代記など近畿王朝の系図が掲載された多くの文献の元史料と思われる資料Ｘは、日本書紀に附属していた系図一巻そのものである可能性もあります。

今回は、前回考察した推定をもとに、江戸時代に塙保己一が編纂した群書類従に収録されている各種縁起と系図の出典を分類し、その縁起、系図の性格を考察しました。従来の九州年号の研究はすべて九州年号の真の姿をダイレクトに追求するものでしたが、その手前で皇代記（資料Ｘ）系統の「干支・年号対比表」の影響を排除しておかなければならないと考えたのが考察を行なった理由です。

なお、今回の調査は、茨木市中央図書館に寄贈されている群書類従・続群書類従・全巻に収録された文献をすべて調査対象としました。群書類従には膨大な文献が収録されていますので、調査から漏れた文献・記述がある可能性はありますが、恣意的な抽出をした調査の結果ではないことを強調しておきます。調査結果の分類については、二中歴（九州年号）系統をＡ属、皇代記（資料Ｘ）系統をＢ属と表記し、Ａ、Ｂどちらにも当てはまらないものをＣ属と表記しました。「続○巻」は続群書類従の巻を表します。

さて、これから群書類従の中にある、九州年号が載っている縁起、系図を一件毎に考察していきます。なお、対象件数が多くなったので、今回は群書類従の中にある縁起、系図を取上げ、次回、続群書類従の中にある縁起、系図の考察と全体のまとめを掲載する予定です。

① 太神宮諸雑事記第一　巻三　Ｂ属

「孝徳天皇大化元年・・・」「天武天皇白鳳二年・・・白鳳四年・・・」とあります。ここまでは代表的なＢ属です。しかしその後に「朱雀三年・・・」の記述が続き、その後に「持統女帝皇即位四年、同六年・・・」という記述が続きます。Ｂ属の朱雀は天武白鳳の前の一年間です。「朱雀三年」はＡ属の記事とＢ属の記事が入り交じった可能性もありますが、後述する本朝皇胤紹運録に同様の「朱雀」年号が見えることから、「朱鳥三年」を「朱雀三年」に書き替えた可能性の方が高いと考えます。

② 日吉社神道秘密記　巻十八　Ｃ属

「第三十九代天智天皇御宇白鳳二年癸酉」、「第三十九代天智天皇白鳳中ヨリ」という記事があります。「天智天皇御宇白鳳二年」は明らかにA属ですが、癸酉は天武二年（六七三年）であり天智二年ではありません。一方で「第四十代天武帝御宇白鳳十年」という記事もあります。A属では白鳳十年は天智期なのでこの記事は、B属です。この日吉社神道秘密記は複数の元史料の寄せ集めであり、編集の際にA属とB属の混乱があったのではないかと考えられます。

③ 二十二社註式　巻二十二　B属

宇佐八幡宮の項に「祈年人皇四十代天武天皇白鳳四年乙亥」とあります。乙亥は天武四年に当たりB属です。その他、大隅国正八幡宮の項に「第四十代天武天皇白鳳二年」、高良（神社）の項に「天武天皇白鳳二年」、因幡国宇部宮の項に「孝徳天皇大化四年」、賀茂（神社）の項に「天武天皇白鳳六年」、日吉社の項に「天武天皇即位白鳳元年」とあります。すべてB属で統一的に記載されています。

④ 竹生嶋縁起　巻二十五　B属

「難波豊崎宮（孝徳）御宇白雉五年」とあります。A属では白雉五年は斉明期にあたるので、B属です。

⑤ 雲州樋河上天淵記　巻二十八　A属

「第三十九代天智天皇白鳳八年」とあります。白鳳八年はA属では天智期、B属では天武期ですので、この記述はA属と見做されます。

⑥ 皇代記　巻三十一　B属

皇代記は、孝徳天皇の条に「大化五年、白雉五年」、天武天皇の条に「朱雀一年、白鳳十三年、朱鳥八年」、持統天皇の条に「大化四年」という対象年号の期間を記載する方法で記されています。なお、文武天皇の条には、「持統大化三年即位」という記述はありますが、対象年号としては「大宝三年、慶雲四年」とあるのみで「年号」としての「大化」は記されていません。「文武大化」を空白とした可能性もありますが、皇代記においては天皇条に記す年号の重複を避けた可能性もあります。

⑦ 皇年代略記　巻三十二　B属

孝徳天皇の条に「大化五、白雉五」、天武天皇の条に「朱雀元、白鳳十三、朱鳥元」、持統天皇の条に「朱鳥七、大化三」とあり、朱鳥を天武と持統で重複させています。なお、文武天皇の条の記載は皇代記と同様に「持統大化三年即位」という記述はありますが、対象年号としては「大宝三年、慶雲四年」とあるのみです。皇年代略記においては「文武大化」を空白とした可能性が高いと思われます。

⑧ 尾張国熱田太神宮縁起　巻三十四

不明

「天渟中原瀛真人（天武）天皇朱鳥元年丙戌」とあります。丙戌は天武十五年（六八六年）であり、A、B共通の年次です。

⑨ 本朝皇胤紹運録　巻六十　B属

・「孝徳天皇大化元年六月十一日受禅、白雉五年十月十日崩」
・「天智天皇孝徳大化元年六月立太子」
・「天武天皇白鳳二年正月廿六日即位、朱鳥元年丙戌九月九日崩」
・「大津皇子朱鳥元年被誅」
・「文武天皇白鳳十二癸未降誕、大化三（月）二（日）立太子、同八（月）一（日）即位、慶雲四（年）六（月）十五（日）崩」
・「元正天皇白鳳十辛巳降誕」
・「持統天皇朱雀五（年）正（月）一（日）即位、大化三年丁酉八（月）禅位、大宝二（年）十二（月）二（日）崩」

本朝皇胤招運録は皇代記、皇年代略記と異なり、対象年号の期間の記述はありません。全体的にはB属で記載されています。「持統天皇朱雀五（年）」はA属の朱雀の年次にはなく、B属の「朱鳥」が「朱雀」に書き替えられたと考えざるを得ません。この用例は、まとめの項で触れますが、「白鳳」「朱雀」が「白雉」「朱鳥」を書き替えたものとする坂本太郎氏の解釈の根拠になっています。

⑩ 上宮聖徳法王帝説　巻六十四　C属

「法興元世一年歳次辛巳十二月鬼前大后崩」という記述があります。「法興元世」が年号ならば、A属にもB属にも属さない別の年号といえます。なお「辛巳」は六一一年（推古十九年）にあたります。

⑪ 家伝上（鎌足伝）　巻六十四　B属

「以中大兄為皇太子改元為大化」、「白鳳五年秋八月」という記述があります。「白鳳五年」の記事のあとで筑紫への移動、白村江の戦いの記述がありますので、この「白鳳」はA属でもB属でもありません。この「白鳳」は明らかに「白雉」の書き替えであると思われます。これも「白鳳」「朱雀」が「白雉」「朱鳥」を書き替えたものとする坂本太郎氏の解釈の根拠になっています。

⑫ 如是院年代記　巻四百六十　A（C）属

・第二十七代継体
『壬寅十六善記元』或曰、継体天皇自十六年始年号在之」とあります。継体天皇十六年が善記元年でこの時年号が始まった、という意味です。壬寅は五二二年で継体十六年にあたり、二中歴と一致します。
「丙午二十正和元」：丙午は五二六年で二中歴と一致します。】
「辛亥廿五教到元。始作暦」：辛亥は五三一年で二中歴と一致します。
・第二十九代宣化

「丙辰第二十九代宣化僧聴元」：丙辰は五三六年で二中歴と一致します。

・第三十代欽明

「辛酉二明要元」：辛酉は五四一年で二中歴と一致します。

「壬申十三貴楽元」：壬辰は五五二年で二中歴の貴楽（五五一年）と一年違います。

「甲戌十五法清元」：甲戌は五五四年で二中歴と一致します。

「戊寅十九兄弟元」：戊寅は五五八年で二中歴と一致します。

「己卯二十蔵知元」：己卯は五五九年で二中歴と一致します。

「甲申廿五師安元」：甲申は五六四年で二中歴と一致します。

「乙酉廿六知僧元」：乙酉は五六五年で二中歴と一致します。

「庚寅卅一金光元」：庚寅は五七〇年で二中歴と一致します。

・第三十一代敏達

「丙申五賢称元」：丙申は五七六年で二中歴と一致します。

「辛丑十鏡常元」：

辛丑は五八一年で二中歴の鏡当と一致します。

「乙巳十四勝照元」：乙巳は五八五年で二中歴と一致します。

・第三十三代崇峻

「己酉二端改元」：己酉は五八九年で二中歴の端政と一致します。

・第三十四代推古

「甲寅二吉貴元」：甲寅は五九四年で二中歴の告貴と一致します。

「辛酉九願轉元」：辛酉は六〇一年で二中歴と一致します。

「乙丑十三光充」：乙丑は六〇五年で二中歴の光元と一致します。

「辛未十九定居元」：辛未は六一一年で二中歴と一致します。

「戊寅廿六和景縄元」：戊寅は六一八年で二中歴の倭京と一致します。

・第三十五代舒明

「己丑聖徳元」：己丑は六二九年です。聖徳は二中歴にはない年号です。二中歴ではここに六二三年の仁王という年号が記されています。「乙未七僧要元」：乙未は六三五年で二中歴と一致します。

「庚子十二命長元」：庚子は六四〇年で二中歴と一致します。

・第三十七代孝徳

「丁未三常色元」：丁未は六四七年で二中歴と一致します。「甲戌六白雉元」：甲戌は六五〇年で二中歴と一致します。

・第三十八代斉明

「辛酉七白鳳元」：辛酉は六六一年で二中歴と一致します。

・第四十代天武

「即位之年壬申改元朱雀」：壬申は六七二年でB属の朱雀と一致します。

「癸酉二改元白鳳」：癸酉は六七三年でB属の白鳳と一致します。

「甲申十三、十二年朱雀元」：甲申は六八四年で二中歴の朱雀と一致します。

「丙戌十五大化元。和州献赤雀因茲改朱鳥」：丙戌は六八六年でB属の朱鳥と一致します。

・第四十一代持統

「壬辰六大長元」：壬辰は六九二年です。大長は二中歴にはない年号です。

・第四十二代文武

「辛丑大宝元」：辛丑は七〇一年で大宝元年です。「甲辰慶雲元」：甲辰は七〇四年で慶雲元年です。

如是院年代記は九州年号の基本文の一つとして多くの研究がなされていますが、天武期にB属の上書きによると見られる混乱があります。

＊本件については、丸山晋司氏が『古代逸年号の謎』において、『『続群書類従』本に見られる『壬申朱雀・癸酉白鳳・丙戌朱鳥』は後代の加筆である」と考察しています。

「道をゆく」三三

成瀬和之

「女芭蕉の心意気　桑原久子の旅日記から」（一）

「芥川だより」二〇〇号をめざして、「道をゆく」シリーズを再開します。

江戸、天保の頃。筑前の商家の五〇代（人生五〇年の時代ですから、今の七〇代にあたるのかも）の女将達四人が荷物持ち兼ボディーガードの男三人を従え、伊勢神宮から善光寺、日光へと突き進み、江戸、京、大坂見物をして帰るという、和歌を詠みながらの五カ月八〇〇里の旅をしました。しかも「入り鉄砲、出女」を取り締まる関所を迂回して、元高校山岳部顧問をした経験のある私も、「こんなところを」と驚く長野県や群馬県の山道を踏破しているのです。関所や防衛上橋がかけられていない大井川などを回避して、女たちがいかに旅を楽しんだか、コロナ禍で行動制限を経験している今日の私たちにも大いに参考になります。

二〇二一年、芦屋町（福岡県）の町政一三〇周年を記念して「芦屋かるた」がリニューアルされました。その「芦屋かるた」の中の「ふ」は次のようになっています。

二荒詣　お内儀さんらの　珍道中
（ふたらもうで　おないぎさんら

の　ちんどうちゅう）

「芦屋かるた」の解説には「江戸時代の芦屋の女性達の精神、生き方、逞しさを知ることができる」とあります。

その珍道中の「追っかけの旅」をしました。桑原久子の『二荒詣日記』をベースに、私が見聞し、あれやこれや考えたことを書き記す連載を始めます。どうか『われもまた熊野古道』同様に私の旅におつきあいください。

『二荒詣日記』は、筑前国遠賀郡芦屋（現、福岡県遠賀郡芦屋町芦屋）の商家「米伝」の女主人であった桑原久子（比佐子とも記す、一七九一～一八五三）が、一八四一年（天保一二年）潤正月、同年六月までの五か月間、約八〇〇里（三二〇〇キロメートル）の旅をした時の旅日記です。

この旅は久子が計画し、彼女と同門の友であった鞍手郡底井野（現、中間市）の商家「小松屋」の女将、小田宅子らを誘った旅でした。そしてこの旅では、少なくとも二つの旅日記が書かれました。

桑原久子の『二荒詣日記』と小田宅子の『東路日記』です。

『東路日記』は、こんな出だしから始まります。文中の「主婦」は今日では「女主人」と言うべきでしょう。

宅子さん、お伊勢詣りに行きまっしょうや、拍子もない話のごとありますが、ほんなこて旅は足腰たつうち。気の合う同士の旅や、よござすばい。来春あたりに・・・」そういうのは、五〇歳の主婦、桑原久子。つやつやした頬に、口もとに零れる微笑み、小太りで、落ちついた物腰、富裕な商家のお内儀さんの威厳と貫禄があるが、同時に表情には伸びやかな、柔らかい色があって、普通のお内儀さんには見えない。

旅に出たとき、久子は五一歳、宅子は五三歳でした。他の二人の女性はその名も年齢も不明ですが、おそらく同年輩の人たちであったと思われます。

久子と宅子は、鞍手郡古門村の神官で国学者であった伊藤常足（一七七四～一八五八）の門人でした。

『二荒詣日記』は、旅が終わってから三年経った一八四四年（天保一五年）、作者五四歳の時に完成したもので、これについて常足は、その序文の中で次のように記しています。

・・・げに通りけむ道すじのことなど大かたにかきしるし、歌をも所々はへたるのみにて、こころをいれたるにはあらず。

・・・おのれはた、あづまの国々のさまをしらざれば、このふみに西よ東よなどいへるは、ただしくあたれりやしらず。されば、いまうたのみをいささか引直して、ふみのことはそのままにしてかへしつ。

これは、「老行末のこころなぐさにもとかきあつめ侍りつるのみなれば、一わたり見渡し給ひて、むげにきこゆまじきふしどもをば引直し給ひてよ」と乞うた久子の気持ちに応じたものでした。

元来、久子はかなり中年になってから常足に入門したのですが、一八五三年（嘉永六年）六月、六三歳で亡くなるまで和歌の才に恵まれた女性で、未完の歌集『重浪集』も作っています。しかし、旅から帰って間もなく娘の千代が亡くなり、彼女の身辺があわただしくなったためめに、久子は十分に文章や歌を推敲することなく、常足に作品を見せたのでしょう。常足が「こころをいれたるにはあらず」と述べたのも、彼女の才能と、家庭の事情を知っての上であったのでしょう。

いま、芦屋町の観音寺にある彼女の墓碑には、常足の撰による次の文が記されています。

・・・天保一二年東国を歴観し、同一五年二荒詣日記を録す。奥書に曰く、此の日記を書きて親戚に贈る。うれしきもうきも書きおく水くきをわかなきあとのかたみともみよ

桑原久子は『二荒詣日記』の最後を、次のように締めくくっているのです。

「嬉しきも憂きも書きおく水茎を我がなきあとの形見ともみよ」

（喜怒哀楽私のすべての思いは本にかきとめておきました。自分が亡くなった後は形見として読んでください。）

久子が亡くなった一八五三年六月は、ちょうどペリーが浦賀に現れ、江戸の世が風雲急を告げた時でした。六三歳でした。

伊藤常足は伊勢までしか行っていません。「こころをいれたるにはあらず」かどうか、実際に善光寺や日光など東路を旅して確かめていきましょう。

久子さんは筑前、芦屋の富豪「米伝」（質・両替商）の女主人でした。芦屋は響灘に注ぐ遠賀川の河口に位置する町です。「芦屋千軒」とうたわれ、遠賀川をはさんだ東の山鹿とともに商業の町として賑わいました。舟運の便を利用して物資も情報も集散し、財は文化を運ぶ。商人たちの間に学芸の素養が蓄積していくのは当然です。

紀元前六世紀、商業貿易の発展したギ

リシアの植民市、小アジアのミレトスの人、タレスが西欧における最初の哲学、自然哲学をはじめました。メディチ家がフィレンツェの政権をとるや、その巨富を投げだして古典研究を保護奨励したことが、イタリアにルネサンスをもたらしました。世界史にも、その先例に事欠きません。

久子さんが夫に死別したのは四〇歳の年で、跡取りの栄次郎は一〇歳にも満たない幼さでした。久子さんは老いた舅を頼りにしつつ、家業にいそしみ、子育てをします。

久子さんも入集している筑前歌人たちの歌集『岡縣集（おかのあがたしゅう）』にある作者略歴によれば「久子能く家政を整理し家格を堕さず、郷党に令名あり」とあります。その家は一〇〇〇坪を擁する豪邸でした（現在は光明寺横の保育園になっている場所です。芦屋の港町の桟橋、船着き場を見下ろす「一等地」です）。

久子・宅子さん達の教養と和歌の師匠である伊藤常足先生は地方の小さな神社の神主の家に生まれました。パトロンが必要でしょう。港町芦屋のパトロンの筆頭が、富豪「米伝」だったのかもしれません。

久子さんは息子が成年に達してから、五〇歳にしてようやく閑暇を得、常足の指導を受けて歌を嗜みます。浮世の責務を終えて肩の荷を下ろした時、はじめて「お伊勢詣りに行きまっしょうや」と同門の親友を誘う気になったのでしょう。

小田宅子の『東路日記』については、田辺聖子さんが『姥さかり花の旅笠』（集英社文庫）という本で紹介し、小説にしています。小田宅子さんは、かの高倉健さんの五代前の先祖にあたります。彼には善光寺詣りの習慣がありました。「宅子おばさんとぼくが、善光寺を通して結ばれていたのだ」（『あなたに褒められたくて』（高倉健著、集英社文庫）と高倉健は書いています。そんな話を聞くと、世の高倉健ファンとしては小田宅子に注目したくもなるでしょう。しかし、この旅の発案者、立役者は桑原久子さんであったことは忘れてはなりません。

プロパガンダに騙されるな
―学び直そう戦争と憲法の歴史（八）

成瀬　和之

前回、戦争プロパガンダに騙されないためには、日本の古代史と近代史の「二重の隠ぺい、改竄」を克服し、日本史を根本から学び直す作業が必要となっていると書きました。今回は、その続きです。

大久保利通・西郷隆盛と並んで「維新の三傑」と言われた木戸孝允は、「明治元年一二月十四日（一八六九年一月二六日）の日記にこう書いています。（今日の言葉に訳しています）

岩倉具視から日本の前途にとるべき方策を尋ねられたので、いくつか答えたが、そのなかで、もっとも大事な問題として、速やかに政治の向かうべき方向を一つに定めて、使節を朝鮮に派遣し、朝鮮の無礼を問いただし、朝鮮がそれに不平のときは、その罪を言い立てて、朝鮮を攻撃し、神国・日本の威力をおおいに伸ばすことだ、と提言した。

「明治元年一二月一四日」と言うのは、新政府の成立を朝鮮に伝えるため、対馬藩の家老、樋口鉄四郎が出発した三日後です。朝鮮の反応がまだ何もわからないときの日記です。

つまり、日本の天皇の新政府の成立に対する朝鮮の反応が「無礼」なのかどうかもわからないときに、既に明治政府の最高幹部が朝鮮への攻撃を新政府の基本方針の第一に挙げていたのです。

なお、木戸孝允が師事した吉田松陰が既に「征韓論」を唱えていたことを付言しておきます。

「神話にもとづく神国意識を核として形成された神国ナショナリズムには、その形成過程そのものの中に、排外主義・侵略主義が埋め込まれていたのでした」（『日本ナショナリズムの歴史Ⅱ』（梅田正巳著、高文研、二〇一七年）

これは、「過去の話」でしょうか？

二〇一六年、日本で開催されたG7サミット最初の公式行事としてG7の首脳たちを伊勢神宮に集めました。この伊勢神宮は太平洋戦争のとき、「八紘一宇（はっこういちう）」のスローガンのもと、「神の国日本」が世界を支配するとの思想を臣民に植え付け、戦争に動員した国家神道の総本山です。

この行事を仕組んだ安倍元首相の思惑はどこにあったのでしょうか？

まさか外国の元首たちに「天照大神」への信仰を求めたのではないでしょう。

日本人の頭をもういちど「神話の世界」にひきもどすこと、明治以後、一九四五年の敗戦までの「神代から続く万世一系の天皇の支配が当たり前の神の国」であると二一世紀の日本人の頭に刷り込む、そういう機会として利用するために、サミットを伊勢志摩で開催したのではないでしょうか？

梅田正巳の言う「神権天皇制」は、けっして過去の亡霊とは言い切れないのです。鶴岡八幡宮と住吉大社という、東西の初詣の「横綱」級の神社の祭神に「神功皇后」が加わったままなのですから。より詳しく知りたい方は、『日本人の明治

観をただす』（中塚明著、高文研、二〇一九年）をご覧ください。

俳句

土田　裕

佇んで木犀の香に身を任す
何をしに来たかを忘れ虫を聞く
交番の机に一つ青林檎
小春日や予防注射の痕痒し
探鳥家鷹と指さす先は点

影山　武司

棟上の木の香の満ちて天高し
鉤の手に曲がる参道こぼれ萩
あいさつの瀬音縫ひくる峡紅葉
秋うらら写生の子らの赤白帽
きちきちの逃げ足早し子の後ろ
おーい雲おーい旅人呼んで秋
秋日さす優先席の揺れ心地
晩鐘や風に乗りくる秋の蝶
水底に日のさざなみや蘆の花
花びらを寄せて飲み干す菊の酒

編集後記

SK生

▼友人から「行ってきました」というメールをもらい何十年かぶりでその一冊の本を開いてみた。長野県上田市にある無言館を紹介した本である。無言館は戦没画学生たちの作品が数多く保存、展示されていることで有名な美術館だ。この本には戦没画学生の遺作と作者の略歴、そして、作者にまつわるエピソードが短い文章で綴られている。その戦没画学生が出生前に家族に託し残された家族が五十年以上も大切に保管してきた作品が無言館には並んでいる。▼意外なのはその作品の中に女性像が目立つことだ。多くはないが女性の裸体像もある。やがて戦場で死ぬ覚悟をしていた若き画家たちは妻や恋人にモデルとなってくれるよう懇願したのであろう。そして女性たちはそれに答えようとした。よく見ると絵に描かれた女性たちの表情はどれも硬い。これを見て感じるのはただ一つ。哀しく切ない、である。▼今もウクライナの地では多くの若者が志願して、あるいは強制的にかりだされて戦場にいる。そして、我が国では政府によって軍備拡張がずるずると進められている。国民がゆっくりと考える暇も与えないほど性急に、そして一部メディアの煽りも受けながら。どこまでも美しい事物と景観を愛し描き続けた亡き戦没画学生たち。彼らがもはや何も語ることができない以上、今生きている我々は何をしたらいいのか。▼無言館には訪れた人にむけてのノートが用意してある。そのノートに書かれたある感想。「空を青く描く人が少なかった。灰色もしくは茶色の空が多かった」若き画家たちが見た空の色は彼らの心情表現だったのか。とすれば今の若者たちは何色の空を描くのか。望むらくは彼らの描く空はどこまでも青色であってほしい。いつまでもである。

秋の薔薇園より

京都府立植物園にて
Photo by Gorou Ishikawa

連載 ふみの道草（53）　山椒魚

既往症貧乏と書く予診票

近くの公民館で秋の文化祭があった。公民館にはいろいろな教室がある。たとえば、大正琴、子どもダンス、ハーモニカ、チアダンス、フォークダンス、日本舞踊、パステル画、日本画、切り絵、川柳、俳句、パッチワーク、等々である。舞台発表と展示発表が同時進行で行われ、秋の一日、地域の子どもたちから老人まで、多くの人々が入れ替わり集ってにぎやかなことであった。表題は、短冊に展示された川柳の一句である。

かたちは心であり心はかたちになる

文化祭の全体を通して見て感じたのは、これはまさしく一人ひとりのそうした自己表現の場になっているということであった。展示されていた川柳と俳句の一部を、以下に紹介する。作者名はとくに記さない。

刻まれた深さに感謝母のシワ

広いのは母の心と青い空

落し蓋しても未練の吹きこぼれ

古稀過ぎて頑張る仕事ある感謝

人情の底を流れて溢れる湯

砂かぶり力士白黒飛んでくる

赤トンボ暑さの中に秋を告げ

父を越え目指すは遠い母の齢

砂遊び子供に帰る老二人

行合の空に帰燕の群の見ゆ

向日葵に涙雨降るウクライナ

冬空や儚きとよむ人の夢

異次元の独り芝居でショータイム

スポーツの闇にお金の匂いする

世の不安忘れて入るバラの風呂

愛と書くもうそれだけで熱いペン

逆転の狼煙ひとりのコップ酒

あの仕草おもしろいほど親に似る

この道のように曲がって春は来る

許す気になった時から動く朝

継続の力を信じ流す汗

万物を溶かして深くなった海

生きて来た爪の硬さがいとおしい

母からの便りのように舞うホタル

故郷を離れて募る里心

コスモスが揺れてわたしも秋になる

人を恋ういいな心は春になる

だいじょうぶ静かに叩く母の雨

北風が吹き荒れ父の菜っ葉服

句の上手下手はおいて、知らない人の句の世界に誘われ、そこに「わたし」自身を見ることができれば、その句は私にとっていい句だと言えるだろう。それは時として数百年の時空を越えることもある。五七五、たかが十七音字と馬鹿に出来ない。大河小説を越える句にだって、出合うことがあるのだ。

コスモスと噴水